

高齢化などによる医療ニーズの増大で医師が多忙を極める中、医師に代わって特定の医療行為を担う高度なスキルを持った看護師（特定行為研修者）以下、特定看護師の重要性が高まっている。その特定看護師として、印西市の日本医科大学千葉北総病院で、入院患者の褥瘡（じよくそう）＝（床ずれ）の痛みに向き合ってきた。

医師や看護師、薬剤師、理学療法士などさまざまな職種約30人のチームからなる褥瘡対策委員会の委員長を務める。もともと医師が委員長を務めていたが、「褥瘡のケアは予防が中心。看護師が担う部分が大きい」ため、看護師ながら委員長の大役を任された。もともと、日本看護協会認定の皮膚・排泄（せつ）ケア認定看護師で、傷の処置や床ずれの対応に当たってきた。重症の床ずれは、壊死（えし）した皮膚をメスで取り除くなどの医療行

医師に代わって痛みに対応

●日本医科大学千葉北総病院 看護課長・皮膚・排泄ケア認定看護師・特定看護師 渡辺光子さん(54)



渡辺光子さん

為が必要だが、それができるのは医師だけ。しかし、大学病院で医師が対応できないのは週に1〜2回ほどしかない。その間、痛みに苦しむ患者を目の当たりにし「早く対応すれば、もっと早く治るはず。自分でできれば、このシレンマが解消できるかも」と厚生労働省の研修を受けた。

特定看護師となり、主治医への報告は必要だが、床ずれや傷に関する医療行為は手順書に従って行えるようになった。現在は約600床もの巨大病棟を駆け回り、患者の痛みの訴えにチームで迅速に対応。その間に「医師は別の対応がで

き、もう一つになったという。痛みが少ない細やかな処置は看護師の方が得意」といい、例えば陰圧閉鎖療法という傷を医療器具で覆う治療では、定期的に取り換えが必要。ところが、「医師は急いで処置をしてしまいがち。私たちは痛み止めのタイミングを図ったり、傷を保護しながら剥がすスキルがある」と患者に寄り添った対応を心がけている。

重症の床ずれを発症する患者は、じつは痛みから「こんな状況ではもう何も楽しいことなどできない」と苦悶を訴える人もいる。懸命に傷をケアして「最近は大分良くなって旅行に行ってきたのよ」と笑顔で言われた時が一番の喜び。傷を治すだけでなく、患者さんがいつもの生き生きとした生活を取り戻したのを実感できた」と、その看護は傷だけでなく心も癒や

「これから看護師を目指す若者に対し」看護師は患者さんの人生に貢献できる仕事。興味があるならぜひ飛び込んで」とほほえんだ。



入院患者の床ずれの状況を確認し、チーム内の他の看護師らに指示を出す渡辺さん（左）＝日本医科大学千葉北総病院

看護師という選択

看護師は医師の下働きみたいでつまらないなんて思っていないませんか。今や高度なスキルをもった看護師の地位は向上。医師に代わって特定の医療行為をしたり、自らの救急救命の知識を他の医療スタッフらに指導するなど、院内のリーダとして、医師をもしのぐ活躍をしている看護師もいます。道路を決めかねている学生の皆さんへの参考になればと、第一線で活躍する人の看護師の仕事ぶりを紹介し

協力：公益社団法人 千葉県看護協会